

常照

佛教大学附属図書館

2025

NO 72



B 佛教大学附属図書館

図書館という空間は、 「知」と「人」をつなぐ場所

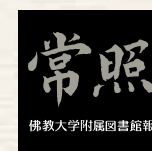
佛教大学長 佐藤 和順

佛教大学図書館報『常照』第72号の刊行にあたり、学長として一言ご挨拶申し上げます。

紫野キャンパス図書館名の「成徳常照館」は、書物をひもとく者が努力して、立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。本誌の題号である「常照」にも、「光が常に照らし続けること」、すなわち仏の智慧が時代や人を超えて人々を導くという願いが込められていると承知しております。それはまた、時を越えて読み継がれる書物の存在にも重なる言葉です。図書館という場は、まさにその「常照」の精神を体現する空間であり、学びと気づきの原点であるといえるでしょう。

佛教大学は、浄土宗開祖・法然上人の教えに基づき、仏教的精神を礎とした人間教育を掲げて創立されました。「行学双修」の理念のもと、知識の習得と人格の涵養とを一体のものとして育むことを目指してきた本学にとって、図書館は単なる情報資源の集積所ではなく、まさに大学の理念を具現化する重要な「学びの場」です。

現代は、デジタル技術の急速な進展により、情報へのアクセス手段が飛躍的に拡張された時代です。オンライン検索や電子書



2025 NO. 72

ご挨拶

佛教大学長 佐藤 和順

1

浄土宗北海道開教史とアイヌ語訳『一枚起請文』

附属図書館長・佛教大学副学長・仏教学部教授 細田 典明

3

絵画資料から学ぶ祇園祭

歴史学部歴史文化学科教授 八木 透

4

図書館を活用する

教育学部臨床心理学科教授 鈴木 康広

9

図書館が提供する障害のある学生への支援

教育学部教育学科教授 松戸 宏予

14

佛教大学附属図書館の事業活動報告

(2024年度～2025年度前半期)

19

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

21

籍、 Σ を活用した情報処理は、調査・学修の効率を高め、多様な学びを支える有用な手段であることは疑いありません。しかし、こうした便利さの中にあつてなお、私たちは「書物を手に取り、じっくりと向き合う」時間の意義を見失つてはならないと思います。

一冊の本に触れ、その頁をめくりながら著者の思索に寄り添う——その営みは、知識の獲得を超えて、自らと向き合う沈黙考の時間であり、人生の問いと向き合う静かな対話の場でもあります。図書館は、そうした深い学びの営みを支える「知の場」であり、また「人の場」でもあります。

本学図書館は、長年にわたり、蔵書の充実、閲覧環境の整備、レファレンスサービスの強化、そして学生・教職員への情報リテラシー支援など、多方面にわたる取り組みを展開してきました。特に、貴重な仏教資料の収集と保存・活用は、佛敎大学ならではの特色であり、国内外の研究者にとつても大きな価値を有しています。

また近年は、学生が学修・研究に図書館を積極的に活用する機会が増えていることを大変喜ばしく感じております。授業との連携、展示企画、図書館スタッフとの協働など、「使われる図書館」から「共につくる図書館」へと、その機能と姿勢は着実に進化しています。こうした変化は、図書館が

これからの時代においても、なお知の中核として存続し続けることを示唆するものです。

私は、図書館という場にこそ、佛敎大学の教育の本質が表れていると考えております。それはすなわち、「他者を知り、自らを省み、よりよく生きようとする」姿勢を養うことであり、そこには常に人へのまなざしがあります。

私の座右の銘の一つが「和顔愛語」です。柔らかな顔つきと優しい言葉で人に接することを説いたこの教えは、対人関係だけで

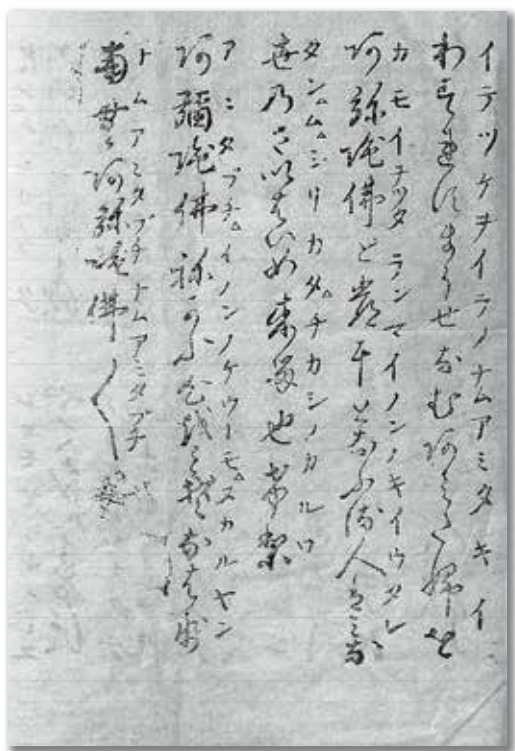
なく、学びの姿勢にも通じるものです。本に向き合う態度、資料を扱う所作、他者の思索に触れる謙虚な姿勢——図書館という空間には、この「和顔愛語」の精神が静かに息づいているように思います。

今後も、佛敎大学図書館が、「知」と「人」をつなぐ場として、ますますその役割を広げていくことを願つてやみません。そして、本図書館報『常照』が、読者の皆さまにとつて新たな発見や対話の契機となり、学びへの一歩を照らす光となることを、心より願っております。



附属図書館長・
佛敎大学副学長・仏敎学部教授
細田典明

浄土宗北海道開教史と アイヌ語訳 『一枚起請文』



弁瑞撰善光寺蔵版『念佛上人子引歌』。『子引歌』末。三行目を除いて各行に「阿弥陀佛」の語があり、「アミダブツ/チ(?)」と音訳されていますが、二行目は「カモイヲ(?) ッタ」と訳されています。[関口静雄・宮本花恵「<資料>有珠善光寺関係資料」『昭和女子大学大学院生活機構研究紀要』第二六号、二〇一七年、四〇頁。]

本学に赴任する前の年に、日本史専攻の博士論文(宮本花恵『近世浄土宗と蝦夷地』2019年[<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/74557>])の副査を依頼されたことがありました。それまで、蝦夷三官寺の一つとして浄土宗の有珠善光寺、そこでのアイヌ語がカタカナで付された子引歌の印行、といった程度の知識しかありませんでしたが、この学位請求論文によって、有珠善光寺二世鸞洲をはじめとする近世浄土宗の北海道開教について知ることが出来ました。以下、この論文で学び得た記述を基に、鸞洲と彼以降の善光寺住職の開教活動の一端を紹介し、最後に阿弥陀仏や極楽がどのように訳されているのか触れてみます。

したが、有珠到着前に急逝したため、鸞洲が有珠善光寺二世として八年間住持しました。江戸に帰った後も、徳本行者を江戸招致し、京都では知恩院門跡院家に就任、尊超法親王の准院家となり、福田行誠は鸞洲の弟子であることが知られています。行誠は、慶應三年(一八六七)に『徳本行者伝』全三巻を刊行しましたが、「北海道」の名付け親、松浦武四郎に鸞洲や『子引歌』を作った三世弁瑞の情報を提供し、武四郎の『東蝦夷日誌』(一八六三)は近世の浄土宗北海道開拓史の重要な資料となっています。

国立アイヌ民族博物館が創設され、『ゴールドン・カムイ』がヒットするなど、アイヌ文化への関心が高まりました。その中で、『一枚起請文』が二百年以上前にアイヌ語訳に訳され、有珠のアイヌの人々の半数近くが念仏数珠繰りを行ったことなど、浄土宗の開教史として広く認識されるべきことではないかと。

『一枚起請文』には英訳と独訳が知られますが、アイヌ語訳が存在することは、とても貴重な遺産と言えます。『一枚起請文』でも『子引歌』でも、「阿弥陀佛」は、ほぼ「アミダブツ」と音訳されますが、『一枚起請文』で、「ただ往生極楽のためには南無阿弥陀佛と申して疑ひなく」の文は「イオマンピリカコタンクラス。パクニナムアミダブツアリイエカネカシエナヘンネ」と訳されています。「ピリカコタン」は、「美しい村」という意味になりますが、『知床旅情』で有名になった「ピリカ」の言葉が、極楽の訳として使われて「美しい」響きが伝わります。

絵画資料から学ぶ祇園祭

歴史学部 歴史文化学科教授 八木 透

はじめに

写真や映像というものがなかった前近代の人々のくらしを知るためには、もちろん文献史料がもつとも有益であることは言うまでもないが、特に年中行事や祭礼等の詳細を知るためには、絵画資料が非常に役立つことは周知のことであろう。絵画はその時代に生きた人物が描いたものなので、写真とは異なり、何らかの恣意性を帯びていることは確かだ。しかしそのことを差し引いても、写真や映像に代わる貴重な資料であることには変わりはない。

筆者の研究対象のひとつは、中世から近世にかけての京都の祭礼等の年中行事の歴史の変遷を探ることである。その際にとても役立つのが種々の絵巻物や「洛中洛外図屏風」だ。「洛中洛外図屏風」には、必ずといってよいほど祇園御霊会の様子が描かれている。それは、祇園会が各時代を通して京都を代表する祭礼であるとともに、特に神輿渡御や山鉦巡行が何よりも華やかな演出であり、まさに絵になる対象だったからにほかならない。



祇園祭山鉦の歴史

文献上、「鉦」とよばれるものが祇園会に登場するのは十四世紀初頭である。それは「風流囃子物」といわれる、鉦・笛・太鼓などにあわせて踊る一種のにぎやかな歌舞を意味した。それを支えたのは「鉦衆」とよばれ、「剣鉦」などのいわゆる武器としての原初的な「鉦」を飾り立て、その周囲で歌舞を演じる芸能集団であったと思われる。さらに「鉦衆」はひとつやふたつではなく、多くの集団が参加していたようで、それらを経済的に支えたのは京都の「下辺」、すなわち後の「下京」在住の富裕な商人たちであった。一方「山」は鉦のような武器状のものではなく、趣向を凝らした「作り物」、すなわち見物客たちの目を引くような見世物の一種であったと考えられる。「山」というからには、やはり常緑樹を飾り付け、そこである場面が作り出された種々の見世物が演じられた。今日でも多くの

「山」には人形などの見世物が設えられているが、それが「山」本来の姿なのである。もともとこれらの「鉦」や「山」は、もとは祇園御霊会の神輿渡御に付随した出し物であり、いうならば神輿の先導役というべき存在であった。しかし、やがて華やかな山鉦は神輿以上に見物人たちの注目を集めるようになり、ますます華美になっていった。「風流」とは本来見る者たちを喜ばせ、あつと驚かせるような存在であったから、時とともに巨大化したり華美に変身してゆくのは当然のことでもある。また本来は厳肅な神事である神輿渡御の先触れとしてのパレードであったものが、やがて独立し、十五世紀には神輿が出なくても鉦や山の巡行だけは行われるという事態になっていったのである。

このように、南北朝時代に発生したと考えられる山鉦は、室町時代になると益々目立つ存在となり、一定の形式を有するようになってゆく。それは「鉦」・「山」・「傘」・「船」という多彩な

形態である。現在の祇園祭に登場する三十四基の山鉦のうち、「傘」は二基、「船」は船鉦と大船鉦として残っている。これらの原型は十五世紀のはじめ頃には完成していたのである。そして山鉦はさらに巨大化し、贅をつくした装いを纏いながら発展していった。応仁の乱以前の山鉦を記した史料には、六十基以上の山鉦の名が記されている。その中のほとんどが「長刀ほこ」や「庭とりほこ」など、今日の山鉦と同じ名称が付けられており、今から約五五〇年前にはすでに今日の祇園祭と変わらぬ山鉦が都大路を巡行していたことがうかがえる。

応仁元年（一四六七）に起こった応仁の乱は、京都の町の大半を焦土と化してしまった。当然多くの山鉦が焼失した。さすがの京都の町衆もこの打撃は大きかったようで、山鉦が復興するのは、乱後三十三年を経過した明応九年（一五〇〇年）のことであった。しかし復興を遂げた山鉦は三十数基だけであり、応仁の乱以前と比べて約二分の一の減少であった。またこの時から山鉦の巡行順を決めるくじ取りが行われるようになり、先頭の「長刀鉦」、最後尾の「神功皇后の船（凱旋船鉦）」をはじめ、限られた山鉦がくじ取らずとして巡行順が定められることになったのである。

屏風に描かれた祇園会

祇園会の主役はあくまでも神の乗り物である神輿だ。しかしそれが、いつの頃からか山鉦が



神輿を押しつけて、主役の座にしゃしゃり出るようになったのではないかと考えられる。これは祇園御霊会における主役と脇役の逆転を意味した。このことを裏づける資料が「洛中洛外図屏風」である。

数ある洛中洛外図屏風には、ほぼ例外なく祇園御霊会の様子が描かれている。その中で、十六世紀に狩野永徳が描いたとされる国宝指定の「上杉本洛中洛外図屏風」には、鴨川に架けられた四条の仮橋を渡って御旅所に向かう三基の神輿と、それに従う多くの人々が賑々しく描かれている。さらに鴨川の西には、長刀鉾や蟠螂山などの八基の山鉾が描かれている。つまり狩野永徳は、祇園御霊会を他地域へ紹介するためには、神輿と山鉾双方を描かなければならないとする明確な意図があったものと思われる。ところが少し時代が下り・十七世紀初期に書かれたと考えられる、本学図書館が所蔵する洛中洛外図屏風（以後「佛大本」と称す）には、八基の山鉾が四条通りから寺町通りを南行し、さらに松原通りを西に向かう様子が描かれている。しかしどこを探しても、神輿渡御の様子は見えない。主役である神輿を描かずに、山鉾のみが描かれた背景には、もちろん「佛大本」の作者の何らかの意図があったことは否定できないが、同時に、十七世紀という時代の神輿渡御と山鉾巡行の比重に対する人々の認識の一端がうかがえるのではないだろうか。このような絵画資料の分析より、筆者は十六世紀後半から十七世紀

鉾は四基、山は三基、傘鉾が一基見える。鉾は先頭より長刀鉾、函谷鉾、月鉾、放下鉾であることが確認できる。寺町通りを南行する山は、第一基目は不明だが、二基目は保昌山、四条通りを行く最後尾の山は白樂天山ではないかと思われる。注目すべきは傘鉾で、これは傘の先にご神体の鶏が見えることから、あきらかに今日の綾傘鉾だとわかる。先述したように、傘鉾は応仁の乱以前から少なくとも二基存在していたことがわかっており、その一基が今日の四条傘鉾、もう一基が綾傘鉾である。四条傘鉾は傘の先に松の木を付けており、綾傘鉾は鶏を付けているので、傘の頂を見ればいずれの傘鉾かがすぐにわかるのである。多くの「洛中洛外図屏風」に傘鉾が描かれているが、たとえば「上杉本洛中洛外図屏風」に描かれた傘鉾は四条傘鉾であり、明確に綾傘鉾を描き、さらにその周囲で演じられる棒振り囃子の様子を克明に描いた屏風は珍しい。その意味で「佛大本」の特色を見ることができると。絵をよく見ると、綾傘鉾の周囲で赤熊を被った者たちが、一人は横笛らしきものを吹き、一人が鉦を持ち、二人が対面の状態で太鼓を打ち、もう一人が棒振りを演じている。これは今日でも見られる綾傘鉾特有の「棒振り囃子」であることはまちがいない。ただ、現在の棒振り囃子は壬生村の人たちによって奉仕されているが、壬生村の人たちが綾傘鉾に奉仕するようになるのは近世中期以降のことだといわれていることから、屏風に描かれている棒振り囃

初頭の頃に、祇園御霊会における主役と脇役の逆転があったのではないかと考えている。その背景には、京都下京を中心とした町衆の飛躍的な成長と巨大な財力があつたものと思われる。祇園社の神事から独立した、町衆中心の祇園祭山鉾巡行のルーツをここにかうかがうことができるのである。

「佛大本」に描かれた綾傘鉾

先述したように、「佛大本」には八基の山鉾が四条通りから寺町通りを南行し、さらに松原通りを西に向かう様子が描かれている。そのうち



子は、おそらく中世から存続していた専門の芸能集団によって演じられていたものと考えられる。ただし具体的にどの、どのような芸能集団が綾傘鉾に奉仕していたかは不明である。しかし少なくとも「佛大本」が描かれたであろうと思われる十七世紀初頭に、今日とほとんど変わらぬ衣装を纏い、鉦、笛、太鼓にあわせて棒振り囃子が演じられていたという事実は大変興味深い。さらに偶然ではあるが、筆者は公益財団法人綾傘鉾保存会理事として毎年綾傘鉾の運営に関わっているだけに、三五〇年前の綾傘鉾の姿に出会えたことは感慨深く、何か特別な縁を感じてしまうのである。

『十二月あそび』に描かれた長刀鉾

筆者のもう一つの研究テーマは、祭礼や民俗芸能における女性の関わりについてである。「女人禁制」という語は今やもう死語に近いと思われる方が多いに違いない。しかし今日でも、女人禁制が厳然と生きている場もないわけではない。その象徴的な例が祇園祭の山鉾ではないだろうか。ならば祇園祭の山鉾はなぜ女人禁制なのか。女性はなぜ祇園祭の山鉾には乗れないのであろうか。山鉾と女性との関係について考えることは、まさに現代の重要課題の一つだといえるだろう。

佛敎大学図書館が所蔵する絵画資料に、『十二月あそび』という近世初期に描かれたとされる絵巻物がある。この絵巻物は正確な制作年代や

作者は不明だが、およそ十七世紀前半の京都の十二月に及ぶ著名な祭事を絵と詞書で紹介したもので、旧暦六月は当然ながら祇園祭が取り上げられている。描かれているのは明らかに長刀鉾であり、音頭取りが乗ってまさに巡行中の様子を描いたものである。よく見ると鉾の前方中央に稚児と思しき人物が乗り、舞を舞っている様子がわかる。その両側にいる人物に注目されたい。長い髪を垂らし、着物を着て扇で稚児を扇ぐ姿から、この二人の人物は禿であると思われる。一軒女性のようにも見えるが、鉾に乗る何人かの人物をよくよく眺めてみると、面白いことに気づくだろう。鉾の中央にいて鉾を叩いている人物、よく見ると袈裟を着た僧侶だということがわかるだろう。これはおそらく延暦寺の僧侶で、天台僧に違いない。狭く限られた空間に天台僧といっしょに女性が乗っているとは考えにくい。となると、この二人の禿は男児が女装していると判断することが妥当だろう。つまり、十七世紀の江戸初期には山鉾に僧侶が乗ることがあったようで、現代の感覚からすれば奇妙に映るかもしれないが、当時は祇園会として仏教式の行事だったわけで、僧侶が鉾に乗ることは何ら不思議な事ではないのである。そうすると、想像の域を出ないが、女性が鉾に乗ることはなかったと考えていいだろう。つまり、おそらく近世初期から中期にかけて、女性たちは山鉾から排除されていったに違いないと判断できるのである。

祇園祭の山鉾が原則女人禁制とされている理由について、山鉾の関係者はかねてより「伝統」によるものだと言張ってきた。その見解は現在でも変わっていないと思われる。しかし祇園祭の山鉾に女性が乗れないというのは、はたして伝統だといえるだろうか。そもそも女人禁制の根拠とされる、山鉾が神の依り代として神性を帯びてくるのは江戸時代中期以降であり、山鉾は、本来は神賑わいの風流であり、作り物であった、決して神性を帯びたものではなかったことを説いた研究もある。しかし、これまで祇園祭の山鉾をめぐる女人禁制問題を大々的に取り上げた研究はほとんど見られないのである。

むすびにかえて

本学図書館は、「洛中洛外図屏風」や「十二月あそび」以外にも、「花洛細見図」など近世の京都の様子を描いた貴重な絵画資料を多く所蔵している。冒頭で述べたように、これらの絵画資料は文献史料ではわかりにくい昔の人々のくらしの具体的な姿を今に伝えてくれる、きわめて貴重な歴史資料なのである。これらの資料を最大限に有効活用することで、これまでよくわかっていなかった前近代の人々の営みを詳細に知ることができるものと確信している。

【参考文献】

- 河内正芳 『室町時代の祇園祭』 法蔵館 二〇二〇
鈴木正崇 『女人禁制の人類学』 法蔵館 二〇二二
村上忠喜 『神聖を帯びる山鉾』
『年中行事論叢』 岩田書院 二〇二〇
八木 透 『京のまつりと祈り』 昭和堂 二〇一五
八木 透 『祇園祭―その創始と変遷―』
『祇園祭温故知新』 淡交社 二〇二〇
八木 透 『京都万華鏡』 文芸新書 二〇二五
脇田晴子 『中世京都と祇園祭』 中公新書 一九九九

やぎ とおる
八木 透
歴史学部 歴史文化学科 教授
同志社大学文学部卒業
佛教大学大学院文学研究科博士後期課程修了

専門分野
民俗学 家族史

研究課題
日本と東北アジア地域の家族と通過儀礼をめぐる民俗学研究
日本の民俗行事や民俗芸能の現状と変化の構造を探る研究
日本のまつりと祭祀組織の構造を探る研究



図書館を 活用する

教育学部臨床心理学科教授
鈴木 康広

い本をamazonで注文することが多かったのですが、蔵書検索(OPAC)を使うと図書館に所蔵されていることが判明することが多々あります。その場合、すぐに現物を直接手にして吟味できるメリットが大きいです。またバウムテストの文献をお気軽検索で調べていたとき、Suchenwirth, R.という精神科医の1965年の古いドイツ語論文を取り寄せようとしたところ、アメリカの大学の電子データにヒットして、そのコピー代だけの数百円の料金で数日以内に入手することが出来ました。この利便性にはまったく驚かされました。

「研究」の一環として論文執筆する際に、参考文献と引用文献が、すぐに図書館で参照できることを特筆したいと思います。以下、三項目にわたって述べていきます。第一に、佛教大学であるが故に仏教関係の蔵書が極めて豊富であるこ

日頃から図書館には大変お世話になっていきます。大学での仕事は、教育・研究・臨床であるといわれていますが、これらの三領域に不可分に図書館の存在(活用)が関わっています。今回は、特に「研究」に関しての筆者の私的「活用術」・活用の実際をつまびらかにすることによって、役割の任を果たしたいと思います。

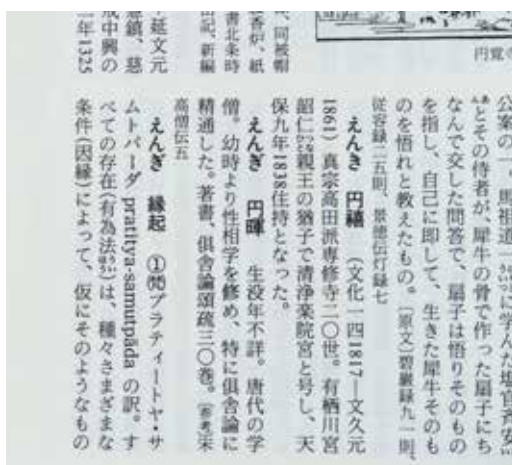
特に最近、恩恵を被っているのが、WEBサービスのポータルサイト(BIRD)です。自宅や研究室に居ながらにして、電子ジャーナルで専門論文を検索して読むことができます。今までは、欲し

と。第二に、二条キャンパスに保健医療技術学部があることで医学関係の蔵書も豊富であること。第三には、私の専門である精神医学・ユング心理学に関連して、特に精神医学について、精神科医である作家の故加賀乙彦先生の小説について言及していきたいと思えます。

1 仏教関係の蔵書

佛教大学であるが故に仏教関係の蔵書が極めて豊富であることに恩恵を賜っています。

「鈴木康広(2023・家族の「布置」と縁起」ある男性の箱庭制作を通して」・日本仏教心理学会学誌 第14号・33(8)を執筆の際に、「縁



(写真2) 総合佛教大辞典



(写真1) 南伝大蔵経3 律藏3

起」を説明するのに「仏教心理学キーワード事典」(2012・春秋社)を孫引きしていました。が、査読者より原典から引用するよう指摘されました。図書館で検索した結果、律藏「大品」(「南伝大蔵経3 律藏3」1938.12) (写真1)にあたり引用することが出来ました。また「縁起」の順観と逆観の説明も、図書館に所蔵されている「総合佛教大辞典」(2005.682.法蔵館)(写真2)から引用できました。

また、「鈴木康広(2023.トポスの共有から河合隼雄先生を考える」・日本トランスパーソナル心理学・精神医学学会誌 vol.24, No.1. 33-41) (印刷中)では、2003年秋に河合隼雄先生がチューリッヒ大学で行った講演で紹介した「華嚴縁起(華嚴宗祖師絵伝)」を引用しました。蔵書検索をしたところ仏教学部資料室に、義湘絵第三巻(小松茂美編 続日本の絵



(写真3/写真4) 義湘絵第三巻(小松茂美編 続日本の絵巻8 華嚴宗祖師絵伝(華嚴縁起) 1990. 中央公論社(新修 日本絵巻物全集 第8巻 華嚴縁起1976. 原色版一. 角川書店)

巻8 華嚴宗祖師絵伝(華嚴縁起) 1990. 中央公論社(新修 日本絵巻物全集 第8巻 華嚴縁起1976. 原色版一. 角川書店)(写真3(写真4)があることがわかり引用することができました。

これらの仏教関係の蔵書がすぐに参照できることは、他の総合大学にはない佛教大学ならではの特色であると思われます。仏教心理学には関わっているが、仏教には門外漢である筆者にとっては、まさに宝の山であり佛教大学に在籍していることのありがたさが身にしみた貴重な体験でした。

2 今日の治療指針(医学書院)

筆者の専門はユング心理学(夢分析、箱庭療法、描画療法)と精神医学であるが、大和内科研修所所長の真栄城輝明先生との縁から、同研修所で一週間の集中内観を体験し、内観法・内観療法(両者を総称して内観)も学ばせて頂いています。そうした事情から、「今日の治療指針2021年度版」(写真5)に「内観療法」を執筆するよう医学書院から依頼されました。「今日の治療指針」は、医療領域における、日常遭遇する、ほぼすべての疾患の治療法を網羅する「全疾患項目、新原稿&アップデート、毎年進化する治療年鑑」です。大変な重責であると同時に名誉なことであり、過去のデータを参照すべく二条キャンパ

スの図書室に所蔵されている「今日の治療指針」(緑帯出)を調べに二条キャンパスに足繁く通わせて頂きました。おかげさまで好評であつたらしく、「今日の治療指針2026年度版」に「内観療法」の項目の執筆の依頼を、現在再び頂いている次第です。

「今日の治療指針」にはテーブル版とポケット版がありますが、二条の図書室にあるのはポケット版で重要書であるため禁帯出です。しかし電子版があるためBRDのリモートアクセスサービスで必要項目を自宅にて読むことができます。様々な疾患に関して標準的な治療法をコンパクトに知ることができるので、非常に貴重な情報源であると思われます。BRDにログインして、学術情報検索・学術情報データベースのところで、分野で保健医療のところ・保健医療・学術情報データベースで「今日の診療(プレミアムWEB)」にアクセスすればよい。医学書院ライブラリーにて「今日の診療プレミアム」にログインするだけです。同時に三台のPCでアクセス可能のようです。キーワード(例えば「内観療法」など)を入力すれば読むことができます。

今回の執筆にあたっては、自宅から「今日の治療指針2025年度版」にアクセスし、先行データを参照することができました。図書館の恩恵は至上のものであるといわざるを得ない。ありがたいことです。



(写真5) 今日の治療指針2021年度版





(写真6)雲の都

3 加賀乙彦の小説

精神科医であり小説家である故加賀乙彦（本名は小木貞孝）先生は、筆者の大先輩である。直接に指導を受けたことはないが、その小説などの創作活動を通して、筆者をそのときどきにおいて導いてくれたメンターです。

エリート養成校だった陸軍幼年学校在学中に終戦を迎え、東京大学医学部に進学し精神科医となる。犯罪精神医学を志し、政府給付留学生としてフランスへ留学し「フランドルの冬」を著す。そこに出てくるドロマル教授は村上仁（元京都大学精神科）教授がモデルという風聞もあります。精神科医の修業時代が、北杜夫の「どくとるマンボウ」シリーズにならって「頭医者記」シリーズに結実しています。東京拘置所の精神科医務官として死刑囚の拘禁反応と向かい合い、たましいの深淵を描いた「宣告」を著す。後年の宗教（カトリック）への傾倒は、たましいの深淵との遭遇が機縁になったと思われる。東京医科歯科大学の助教授として犯罪精神医学を講じるが、学園紛争の時代に過激派学生に研究室を占拠され研究書の一部を破損される。この紛争時代を背景に「湿原」「スケーターワルツ」「海霧」などが著わされた。上智大学の教授となつて、カトリックの信仰をより深めていきました。NHKのドキュメンタリーで聖地を巡礼した「聖書の大地」「殉教者」など（他に高山右近の関連小説）があります。小説の執

な感想と連想を述べることで紹介の任を果たしたい。

医学部に入学当初から精神科医になるつもりだった筆者にとって、犯罪学・精神医学の「フランドルの冬」「宣告」は、ドストエフスキーの「罪と罰」「カラマゾフの兄弟」のようなこころの深淵を深掘りする導き手であった。罪を犯さざるをえない精神的窮乏に追い詰められる様とそこからの救済・償いがテーマになっていきます。京都学派として精神病理学のメッカであった時代（敬称略…村上仁、加藤清、笠原嘉、木村敏、藤縄昭、荻野恒一など）の京都大学精神科において、新人医局員には人間のこころを知るためにまずはドストエフスキーの小説を読むことが薦められたという。

しかし、加賀はそこに留まらない。時代背景を織り込んで、「湿原」においては、前科者と学生運動に巻き込まれた女子学生の葛藤と愛と救済を描いています。

筆の一方、週一日は非常勤の精神科医として精神科外来での診察を継続していました。上智大学を退職してからは、専業の小説家として、ライフワークである「永遠の都」「雲の都」（写真6）に注力していったようです。加賀は、「永遠の都」「雲の都」を書くために作家になったような気がしますと述懐している。それは、日露戦争から昭和初期時代の時田家の年代記「岐路」「小暗い森」「炎都」から、二・二六事件の記憶、陸軍幼年学校における敗戦体験、医学生時代のセツルメント運動、東京拘置所の医務技官時代、犯罪学・精神医学研究のためのフランス留学、「宣告」のモデル・正田昭との交流、キリスト教の洗礼…といった自らの生きてきた八十余年の歩みを注ぎ込んだ九千枚におよぶ大河小説である。時田家の年代記は北杜夫の「楡家の人々」を彷彿とさせるが、日露戦争・昭和史全体から平成時代に至るのは、ドストエフスキーを超えてトルストイの大河小説の醍醐味がある。犯罪学・精神医学研究がもとである「フランドルの冬」「宣告」は人間のたましいの深淵を抉るドストエフスキー的作品であるが、「永遠の都」「雲の都」は「戦争と平和」を彷彿とさせるトルストイ的大作でしょう。軽薄短小な作品がもてはやされるSNS全盛の昨今の風潮にあつて、こうした骨太の大河小説を著わせるのは加賀乙彦先生において他にないと思われます。

詳しくは「加賀乙彦 自伝」（ホーム社）集英社、2013）にあたつて頂きたいが、筆者の私的

そして八十余年の歩みを注ぎ込んだ大河小説「永遠の都」「雲の都」であります。個人的には学園紛争の時代の東京大学精神科の医局における人物像・群像の描写が興味深かったのですが、（昭和初期から）時計台の攻防を経て、平成のオウム真理教事件まで描ききっています。こまで豊潤・芳醇な歴史政治小説・自伝的大河小説は他にはないのではないか。ドストエフスキーを超えてトルストイの境地に至っていると筆者には思われます。

三島由紀夫が「生まれ変わり」をテーマに「豊饒の海」四部作（春の海・奔馬・暁の寺・天人五衰）を著わしていますが、その華美を排して、社会的歴史的事実の肉付けをより重層に配した、ポリフォニーな、より「豊饒」な大河小説が「永遠の都」「雲の都」であるといえましよう。重厚なオーケストラの歴史的名演奏を、加賀という名指揮者を得て、堪能できると思われます。贅沢な時間を堪能できた読後の余韻は名状しがたいものです。たましいの深淵にふれて、人間理解が深まり、読者のこころが豊かになると思われます。

数年前に教員の推薦で図書館の蔵書を購入する企画がありました。筆者の推薦で、「永遠の都」「雲の都」は図書館の蔵書となっています。（岐路」「小暗い森」「炎都」は「永遠の都」の一部として文庫本になっている。）是非一読を勧める次第です。



すずき けんじ 鈴木 康広 佛教大学教育学部臨床心理学科教授

京都大学医学部医学科卒業、学士。ユング研究所CGJIZを修了、ユング派分析家（Zürich, 2008）。博士（教育学、佛教大学）。内科レジデントおよび精神病院での勤務経験を経て臨床心理士・ユング派分析家・国際箱庭療法学会TMI(CST-T)となり、心理職養成の道へ。公認心理師。鈴木クリニック院長、佛教大学特任教授、プラクシス鈴木主宰を経て現職。専門分野は、ユング心理学・箱庭療法・夢分析・精神医学。主な著書『個性化プロセスとユング派教育分析の実際』（遠見書房2018）、『宗教と心理学—宗教的啓示と心理学的洞察の対話』（創元社2011）。監修/分担執筆『砂の癒し・イメージ表現のカートラウマ、発達障害,ADHDをもつクライアントとの箱庭療法』（ナカニシヤ出版2021）、分担執筆に『心理臨床における「あの世」のゆくえ』（春秋社2024）、『仏教心理学入門』（晃洋書房2024）、『内観法・内観療法の実践と研究』（朱鷺書房2023）、『Jungian Dimensions of the Mourning Process, Burial Rituals and Access to the Land of the Dead, Intimations of Immortality』（Routledge, 2024）、『Jungian and Interdisciplinary Analyses of Emotions, Method and Imagery』（Routledge, 2025）。その他論文多数。



図書館が提供する障害のある学生への支援

1. 研究テーマの背景に図書館があった

1.1 ひとりでいても何も言われない場所

私は、障害がある児童生徒、あるいは、学生に学校図書館や大学図書館がどのような支援を提供できるのかを自身の研究テーマとして取り組んできました。このテーマの最初のきっかけは、自身の小学生時代に由来します。早生まれということもあり、私の場合は、表現力が乏しく、また、何かあると嘔吐するなど、学校に馴染めていませんでした。その頃、学級文庫や公共図書館を利用することがありました。たぶん無意識だと思いますが、図書館をひとつの逃げ場にしていたと思います。特に、公共図書館内にある児童図書館に1人で入っても大人から何も言われないところが良かったのかもしれない。

1.2 障害のある生徒と関わるが・・・

中学校の障害児学級の介助員として携わっていた頃、経験学習や知識学習の教材として、学校図書館や公立図書館から絵本や紙芝居、関連資料をよく借りていました。

しかし、当時、特別支援教育は学んでいても、例えば紙芝居のどれを選んだら良いのか、資料について認識があるとは言えませんでした。ましてや障害がある生徒の図書館利用についてもです。その後、知的障害者更生施設や青年海外協力隊員として、ヨルダンの障害のある生徒に関わる機会がありました。しかし、読書との関わり、図書館との関わりといった教育の視点はありませんでした。

のときの研究テーマが、今も継続しているのです。博士課程までは、障害のある児童生徒を対象とした学校図書館からの支援を検討してきました。そして、2010年に佛教大学の教育学部に所属したことをきっかけに、障害のある学生への大学図書館支援に取り組み始めました。

2 大学図書館の障害者サービス

2.1 人的支援にみる障害学生支援の状況と佛教大学付属図書館

表1は2019年に障害学生への支援を主体的に取り組んでいた11大学(国立・私立大学)に聞き取り調査を行い、図書館員が対応する障害学生支援の状況をまとめたものです。この調査には佛教大学附属図書館も含まれていました。

佛教大学付属図書館の特徴としては、ホスピタリティが挙げられるでしょうか。本稿における「ホスピタリティ」の定義は、「利用者の個の自立を前提としたうえで、利用者の顕在的・潜在的ニーズに図書館員が工

1.3 図書館での障害者サービスを学んでも・・・

その後、その当時の仕事の関わりから、科目履修生として司書課程と司書教諭課程を学ぶことになりました。「学校図書館経営」で生徒との関わりがもてる学校図書館の存在や、「図書館活動」や「児童サービス」で、障害者サービスを知りました。協力隊員だったときに、資料や、生徒の図書館利用について自分自身が認識していたら、また助言を与えてくれる学校司書がいたら、同じ紙芝居を読むにしても教育効果は違っていたのではないかと自分自身を振り返るきっかけとなりました。

司書課程で学んだことがきっかけとなって、履修後、臨時職員として、中学校の学校司書として図書館運営に携わることになりました。その学校は通常学校と言われ、特別支援学級はありませんでした。しかし、学校図書館に携わって、実際の生徒との関わりのなかで、LD、ADHD、高機能自閉症、不登校傾向ぎみの生徒など、個別の配慮が必要な生徒が図書館にも来館していることに気がつきました。彼らとの関わりを通して、対応の問題など、自己研修では限界があること、そして、学校図書館ではどのような支援が彼らに提供できるのかといった問いがきっかけとなって大学院で体系的に勉強する必要性を感じました。そ



草木染と羊毛を利用した織物の作品展にて同僚、生徒と一緒に
ヨルダン、アンマンにて 1991.12

夫や配慮で応えていく」としています。

佛教大学では障害のある学生の求めに応じた対応、代行予約、資料受渡し場所の変更などを行っていました。

「情報資源へのアクセス」では、「トークン」という機器を利用し、利用者が本をスキャンして文字の拡大や、色を変えて文字を読むことができます。また、本をスキャンしたら、音声として「トークン」が読み上げてくれます。

この聞き取り調査をもとに、調査範囲を広げて、2020年に質問紙調査を行いました。460大学図書館のうち、285大学図書館からの回答(回答率62%)を基に、学習環境整備や間接支援、人的支援の観点から、障害のある学生支援の実施状況や課題を掘り下げていきました。その中で、支援以前に、障害のある学生が支援を要請するのを躊躇する傾向があり、大学図書館として支援の必要性が見えにくところも明らかになりました。

2.2 大学図書館に依頼を躊躇する障害のある学生も想定した支援の提供

そこで、障害のある学生から支援の依頼はないが、障害のある学生からも躊躇せずに大学図書館へ尋ねやすくするうえで、大学図書館はどのような工夫を行っているのか、285大学図書館のうち、他部署との連携や、具体的な手立てをおこなっていた16大学図書館を対象に、聞き取り調査を行い、結果を以下の図1にまとめました。支援の特徴は、大きく3つのカテゴリーに分けられました。第1に日常業務の延長、第2に研修による意識の変化、そして、第3が支援強化の連携です。

2.2.1 日常業務の延長

日常業務の延長では、障害のある学生に対して「①自立を見据えた支援を行っていること。また、②障害のある学生も図書館には来

表1. 人的支援領域にみる障害学生支援の状況 n=11

支援目的	特徴	支援内容	該当 大学数	%
情報資源への アクセス	合理的配慮：要時間	資料の電子化	10	90.9
		複写の補助・代行	7	63.6
	通常業務の工夫	資料の取り置き	6	54.5
		対面朗読	6	54.5
	合理的配慮	点字資料の借受・収集	4	36.4
		視聴覚資料の収集	4	36.4
	通常業務の工夫・専門性	検索の補助・代行	4	36.4
		レファレンス	4	36.4
ホスピタリティ	合理的配慮	資料の選択・収集	3	27.3
主体的な学習者の 育成	図書館利用者教育	障害の特性により、個別のニーズに応じた対応	5	45.5
		教職員・学生に機器の使い方を教える	4	36.4
学習体制の充実	通常業務の工夫・専門性	オリエンテーション・学習支援	3	27.3
		視覚・聴覚障がい者向けに事前資料作成配布	4	36.4
	合理的配慮	筆談・手話対応	3	27.3
		図書館での対応・案内	3	27.3
		返却日の延長	1	9.1



「布の絵本」も障害のある子どもに有効。通学や通信の学生に授業で紹介している。
(教育学部資料室)

3 佛教大学図書館に期待すること

ました。また図書館職員それぞれによる対応や認識の差を埋めるため、週に1回あるいは月に1回の頻度で図書館職員が情報共有することも重視されていました。他部署との連携が密に取れていることはもちろん、大学を挙げて『ダイバーシティ』を謳い、大学図書館における支援も大学の取り組みの一環となされている点が印象的でした。障害のある学生に対する支援を充実させることは、すべての学生に優しい図書館、誰もが利用しやすい図書館につながっていきます。

3.1 教員に向けた教材としての電子書籍の選択のアピール

表1では「情報資源へのアクセス」として、大学図書館が資料の電子化などを行っています。佛教大学の場合、資料の電子化については、学生支援課が対応しています。しかし、図書館からも電子書籍化している資料をテキストとして選択してもらうよう教員に呼びかける工夫もできると思いました。

なぜなら、佛教大学では、通学の学生の科目履修のみ

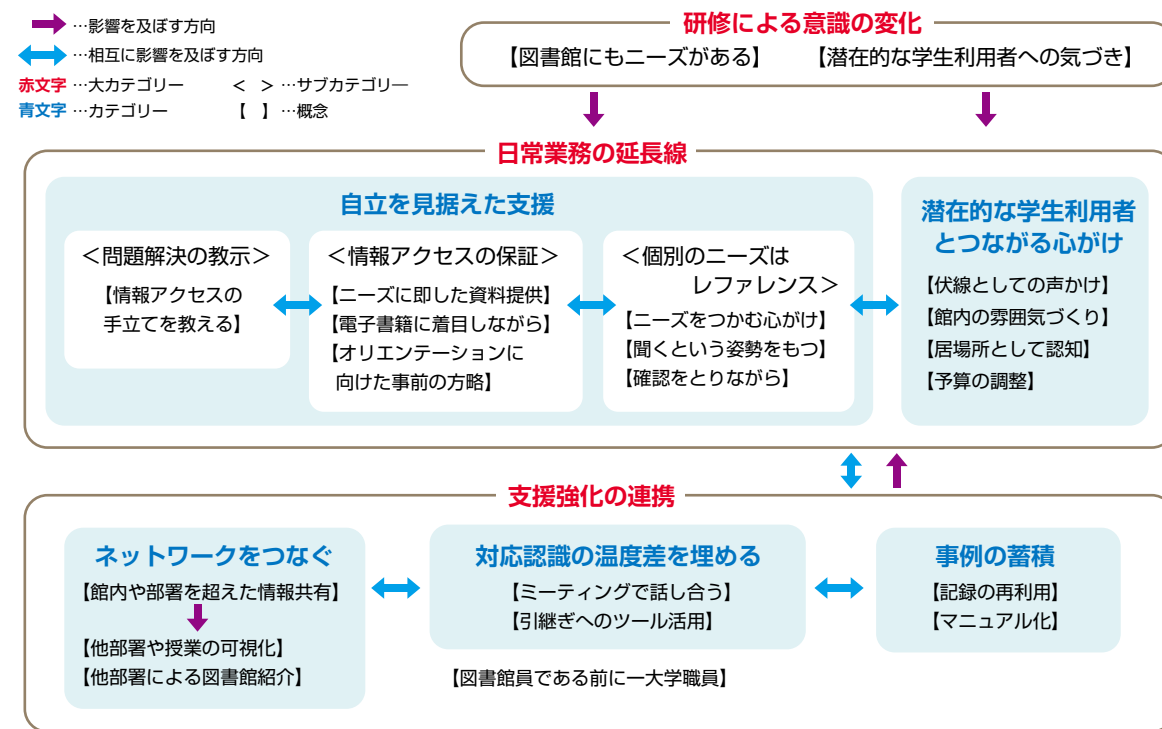


図1. 大学図書館支援の特徴

館しているが、図書館員へ問い合わせや依頼がない場合、図書館員が潜在的な学生利用者につながる心がけを意識していました。

(1) 自立を見据えた支援

自立を見据えた支援では情報へのアクセスの手立てを教えるなどの「問題解決の教示」や、学生のニーズに応じた資料を提供する「情報アクセスの保証」、また各学生がどのようなニーズを持っているのかをつかもうとする心がけや聞く姿勢を持つ「個別のニーズはレファレンス」を行っていました。

(2) 潜在的な学生利用者につながる心がけ

潜在的な学生利用者につながる心がけでは、「日頃から学生に積極的に声かけを行うなど、誰もが気軽に来られるように館内の雰囲気をつくっています。また学生にとって図書館は『居場所』としての意味も持っていることを図書館員が認識し、受け入れる姿勢を持っていました。

2.2.2 研修による意識の変化

この支援の背景にあるのが、第2の特徴にあたる「研修による意識の変化」です。「2016年の障害者差別禁止法の施行に伴って、学内外で研修会が実施されるようになり、図書館職員は、障害のある学生の特徴や対応について学ぶ機会が増えました。研修を受けたことで、『図書館にもニーズがある』『そうしたニーズのある学生を意識するようになった』といった、意識の変化が見られました。

2.2.3 支援強化の連携

さらに第3の特徴として、図書館での「支援強化の連携」として、「ネットワークをつなぐ」ことが挙げられました。「図書館内だけでなく、学生支援課など部署を超えて情報を共有していることがわかり

ならず、通信教育においても、テキスト履修が行われています。読書のバリアフリーに伴い、障害のある学生のテキストを通した内容理解を考慮して、大学図書館からも、通学課程や通信教育課程に関わる科目を担当する教員に向けて、「電子書籍からテキストを選択して欲しい」という啓発面でのアピールがあると、教員が教材選びを行ううえでのヒントとなるのではないのでしょうか。

3.2 学生に対する声かけ

依頼がないから、障害がある学生が図書館に来館していないわけではなく、躊躇していることも予想されます。学校図書館では、人数の規模もあるかもしれませんが、図書館員から来館者に対して挨拶などを行っています。図1においても、他大学図書館ですが、学生が依頼しやすいように、職員に慣れてもらいたいということで、学生に挨拶「伏線としての声かけ」を行っていました。学術図書館ではありませんが、図書館員の心がけで、学生とのラポールを取ることで、学生からの依頼にもつながるのではないのでしょうか。

3.3 合理的配慮が必要な学生の情報共有

2025年度より、合理的配慮が必要な学生に関するケース会議が計画されています。このケース会議では、視覚、聴覚、肢体以外にも、発達障害の学生についての情報共有を得られる機会となります。このケース会議に、ぜひ、図書館からも構成メンバーの一員として参加できれば、図書館職員が学生に対応するうえで、必要な情報が得られます。図書館のみならず、全学あげての情報共有に期待したいです。

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した1934（昭和9）年11月23日に木造2階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート3階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善濃師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く帰依された篤志家上村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、1963（昭和38）年9月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、1972（昭和47）年4月には、開学60周年記念事業として地上5階地下1階建て、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、1995（平成7）年1月に着工し



1997（平成9）年4月に竣工したものです。地上5階地下2階建てで100万冊を収蔵することができま

す。専門学校第7代校長江藤激英師（浄土宗大本山善導寺61世住職）によって撰述されたもので、現在は図書館1階に掲げられています。また、同じく1階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵「転輪蔵」（略して輪蔵）の縮小複製は、1998（平成10）年5月、図書館開館1周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄付されました。輪蔵は、1回転させることによって、一切経を読誦したことに同じ功德を得られるといわれています。

後記

佛教大学附属図書館報『常照』第72号をお届けします。地球温暖化の影響もあり、図書館地下書庫の温湿度が上昇傾向にあります。また、蔵書の増加による書架狭隘化対策として電子資料との調整が益々重要になってきました。古典籍から電子資料まで本学の知的財産を未来に繋ぐ役割を担い、図書館スタッフはこれからも蔵書管理に向き合っています。

佛教大学附属図書館報『常照』 第72号

発行日 令和7年10月23日
 発行者 佛教大学附属図書館長 細田典明
 発行所 京都市北区紫野北花ノ坊町96
 佛教大学附属図書館
 制作 株式会社栄美通信

4月～6月	対面での利用説明会・ガイダンス・図書館ツアー
4月	語学学習・就職活動・学習方法等の電子書籍／教員採用試験過去問シリーズ （佛教大学教育後援会支援金）を展示。
4月～9月	紫野キャンパス図書館地下2階C層資料燻蒸・現地クリーニング
10月	図書館報『常照』第72号を発行
中央展示テーマ（2025年4月～10月）	
4月～6月	ポケット旅図鑑
7月～8月	京都・夏の行事（前期・後期）
9月～10月	浄土双六



中央展示（2025年7月～8月）
「京都・夏の行事（前期・後期）」



中央展示（2025年9月～10月）
「浄土双六」



中央展示（2025年9月～10月）
「浄土双六」



中央展示（2025年9月～10月）
「浄土双六」



教員採用試験過去問シリーズを展示（2025年4月）